中央構造線活断層系川上断層の 断層露頭

森野道夫*・塩田次男**・原 郁夫***・池田小織***・
田中義浩***・市原 健***・森川倫人***・
森山 豊***・谷野宮恵美***・窪田安打***

Michio Morino*, Tsugio Shiota**, Ikuo Hara***,
Saori Ikeda***, Yoshihiro Tanaka***, Takeshi
Ichihara***, Michito Morikawa***, Yutaka
Moriyama***, Emi Taninomiya***, Yasuuchi
Kubota*** : Outcrop of shear zone along the
Kawakami fault, the Median Tectonic Line
active fault system at Yuyaguchi, Tambara
Town, Ehime Pref., Western Shikoku

第1図. 川上断層の露頭位置. 国土地理院 2.5万分の1「伊予小松」
を使用.

*応用地質株式会社, 現所属: (独)産業技術総合研究所 活断層研究センター (NEDO養成技術者) OYO Corporation, Present address :
Active Fault Research Center, AIST-GSJ **徳島大学総合科学部地学教室 Faculty of Integrated Arts and Sciences, University of Tokushima
***応用地質株式会社 OYO Corporation

2001年10月9日受付, 2001年12月20日受理.

愛媛県丹原町湯谷口の中山川河床で, 中央構造線活断層系川上断層の大規模な露頭が現れた. 2001年梅雨時期の増水により, 河床堆積物が洗い流され, 断層露頭が露出したと考えられる. 露頭の広がりには長さ約110mで, 幅約20mに及ぶ. 露頭は市ノ川～砥部時階の中央構造線断層露頭 (岸ほか, 1996) より約100m下流に位置しており (第1図, 第2図), 岡田 (1972) が報告した川上断層露頭の東方延長にあたる. 断層の走向はN75°Eで, 傾斜はほぼ鉛直である. 鮮新統～中期更新統の岡村層相当層の礫層および砂層は, 断層近傍では地層はほぼ直立している. また, 礫層を構成する礫の長軸は断層に沿ってほぼ水平に配列している (第4図). 和泉層群の破碎帯の幅は約20mである. 岡村層相当層の礫層と接するところでは, 幅約1mの厚さで礫層と粘土化した和泉層群が混在している (第5図). その南側は約1mの幅で著しく粘土化しており, 黒色, 灰白色, 褐色, 灰緑色を呈する粘土化帯が縞状の構造を示している. 縞状構造はほぼ鉛直で, 断層面にほぼ平行である (第5図, 第6図). さらに, その南側は破碎岩片がやや多く含まれる粘土化帯よりなる.

文 献

岸 家光・原 郁夫・塩田次男, 1996, 市ノ川時階～砥部時階における中央構造線に沿う浅所岩石の変形様式—愛媛県丹原町湯谷口の例. 「テクニクスと変成作用」(嶋本利彦・早坂康隆・塩田次男・小田国寛・竹下 徹・横山俊二・大友幸子編), 創文, 227-232.
岡田篤正, 1972, 四国北西部における中央構造線の第四紀断層運動. 愛知県立大文学部論集, 23, 68-94.

第2図. 中山川下流より上流西側を眺める. 灰黒色の部分が和泉層群破碎帯 (Iz) で黄褐色の部分が岡村層相当層 (Ok). 約100m上流 (写真左上) に, 市ノ川～砥部時階の中央構造線断層露頭がある.

第3図. 左岸の断層露頭. 露頭はほぼ東西方向に延びる. 川上断層は岡村層相当層の礫層 (Ok) と和泉層群 (Iz) の境界をなす.

第4図. 第3図の露頭を下流側（東側）より眺める。岡村層相当層の礫層および砂層の層理面は、断層より4～5m北側では約30°北傾斜であるが、断層近傍ではほぼ直立している。

第5図. 下流右岸側の断層帯露頭。北側から南側へ、岡村層相当層礫層、礫層と粘土化が著しい和泉層群の混在部、和泉層群の粘土化が著しい部分および破碎岩片がやや多く含まれる粘土化帯よりなる。

第6図. 第5図のねじり鎌より約10m上流。和泉層群の破碎帯であり、粘土化が著しい。断層面に平行な縞状の構造がみられる。色の違いは原岩の違いを示していると考えられる。